

## 形成外科

吉龍澄子

1999年7月に大阪医療センター皮膚科内に形成外科の常勤医1名が赴任してスタートし、2000年4月1日より診療科として形成外科を標榜しました。2007年4月より外科の中で診療を行ってききましたが、2009年7月より形成外科は外科から独立した診療科となりました。

当院は形成外科学会の教育関連施設に認定され、形成外科専門医取得のための卒後教育にも当たっています。

当科は、自科で行う診療および複数の科とのチーム医療における再建外科を2本の柱として行ってきました。院内での腫瘍外科手術の増加に伴い、チーム医療における再建外科としての比率がやや高くなっています。

自科としての診療では、主に顔面、頭頸部の皮膚悪性腫瘍、眼瞼形成術、皮膚腫瘍、ケロイド、瘢痕拘縮などの皮膚外科手術、顔面神経麻痺の形成手術を扱っています。顔面の腫瘍の中でも特に眼瞼の腫瘍は、腫瘍の治療という点からだけでなく、眼瞼の機能、および整容的にも満足いく治療を行うのが重要と考えて治療方針を決め、術式も工夫を行っています。眼瞼癌について放射線科、眼科の協力のもとに、手術だけでなく照射療法なども選択枝に入れて、十分な説明の上、患者様の希望も考慮して治療方針を決定しています。また眼球近くの悪性新生物でも、できるだけぎりぎりまで眼球温存するよう努めています。腫瘍以外では、眼瞼下垂や睫毛内反症、眼瞼外反などの眼瞼の変形や機能障害について、眼瞼形成手術をほぼ毎週数例以上行っています。特に眼瞼下垂の手術では整容面にも配慮した手術を行っています。

顔面の皮膚癌について、四肢の腫瘍や乳癌でおこなわれているセンチネルリンパ節検査の導入を試み、その皮膚癌に適したリンパ節郭清を行う方針を採っています。当科では皮膚腫瘍はできるだけ整容的にそして侵襲を少なく治療するために、植皮方法や皮弁の切開線の工夫を行ってきました。また完全切除をするまでに、腫瘍切除後一旦人工真皮で被覆し、病理標本で完全切除を確認後に再建しています。その他、治療困難な真性のケロイドに対して、切除後の放射線照射療法を含む治療に取り組んでいます。当科は、全国で唯一ケロイドに対して組織内照射を行っていますので、症例や部位に応じて、切除後放射線外照射あるいは組織内照射を使い分けて治療しています。ケロイドの他にも術後の創部の瘢痕拘縮の修正術も行っています。

もう1つの診療の柱として当科では、院内の外科系各科の癌の切除後の再建に取りくんできました。頭頸部再建、乳癌再建が主なものですが、その他、四肢、体幹の再建も増加しています。頭頸部再建症例は形成外科開設以来200例を超え、大部分がマイクロサージェリーによる遊離皮弁の症例です。外科、耳鼻科、口腔外科、形成外科、放射線科、脳外科などによるチーム医療体制が良好なため、安定した再建成績を維持できており、そのため現在まで再建皮弁の壊死などの大きな合併症は1例も起こっていません。特に下顎再建では、顔面神経下顎縁枝麻痺による術後の口唇の変形予防のための手術（筋膜移植）も行っています。

乳房再建は、主に自家組織の皮弁による再建を行ってきました。2013年4月よりシリコンインプラントによる乳房再建も保険適応が一部の形で認められたため、人工乳房による再建を再度スタートしました。現在ではシリコンインプラントによる再建術の方が自家組織によ

る再建術よりも少し多くなっています。

今後も悪性腫瘍、顔面の形成、再建外科、皮膚外科を中心に診療する方針です。

#### 【2015年度 研究発表業績】

##### B-3

吉龍澄子、杉原真梨子、吉田 謙、古妻理之、金澤成行、細川 亙、林 和彦、吉岡靖生：  
ケロイド・肥厚性瘢痕の術後照射療法 一線量と照射方法の検討ー（mシンポ）、第 58 回日  
本形成外科学会総会・学術集会、京都、2015年4月10日

##### B-4

吉龍澄子、杉原真梨子、有家 巧：頭頸部癌切除後の下顎縁枝麻痺に対する一期的筋膜移植、  
第 33 回日本頭蓋顎顔面外科学会学術集会、宝塚、2015年11月13日

吉龍澄子、杉原真梨子：眼瞼下垂手術時における眼窩脂肪移動・固定術併用の経験～重瞼線  
の乱れ予防・sunken eye の改善のために～、第 27 回日本義眼床手術研究会、横浜、2016年2  
月27日

##### B-6

杉原真梨子、吉龍澄子：当院における arrow flap を用いた乳頭再建症例の検討、第 111 回関西  
形成外科学会・学術集会、橿原、2015年12月5日